

非正規雇用教員として働くということ

—地元就職を希望する沖縄の若者を事例に—

上原健太郎（大阪市立大学 後期博士課程）

1. 看過されてきた「教員」

教師／教員という仕事に関する研究には一定の蓄積がある。しかしながら、油布佐和子（2009）が指摘しているように、近年増加傾向にあるとされる臨時的任用教員、つまり非正規雇用教員に焦点化した研究は驚くほど少ない。

なぜ、非正規雇用教員という働き方を選択しているのか（したのか）、そこにはどのような要因が介在しているのか。こうした課題を明らかにすべく、本報告では、沖縄の若者の生活史を事例に、職業選択という観点から非正規雇用教員についてみていく。そして最後に、本研究で得られた知見を整理し、教育社会学におけるインプリケーションを考えたい。

2. 非正規雇用教員という選択

生活史の分析から明らかになった点は次の通りである。

第1に、教員という仕事への憧れや拘りが強い。教員を目指すことになったきっかけはそれぞれだが、比較的早い時期から教員を目指していた者が多く、「教員免許が取得でき

る大学に進学した」という語りが目立つ。また、民間企業に就職するといった意識が希薄な点も注目に値する。

そして第2に、教員という仕事だけでなく、地元沖縄で働くことにも強く拘っている。沖縄の若者のUターン行動についてはすでに多くの指摘があるが（谷 1989 など）、本研究の対象者にも同様の地元志向がみられた。

第3に、親の職業的地位が比較的安定しており、暮らし向きの良さがうかがえる。また、そのことに関連して、大学進学に伴う学費や生活費は、多くの場合、親が援助している。そして、子が教員という仕事や地元拘ることに対してどちらかといえば肯定的であり、非正規として労働市場に参入した後も、洗濯や食事などの身の回りの世話をする親も少なくない。

また、第4に、沖縄県の教員採用試験の倍率は非常に高く、学卒後すぐに正規雇用教員として働ける者はほんの一握りであり、非正規雇用教員としてキャリアをスタートさせることは当然のことだと考えている。そしてこのことは、同じ立場に置かれた者が周囲にいることによって、非正規雇用教員として働くことに後ろめたさを感じなくてもすむという意味で、重要だといえる。

第5に、非正規とはいえ、学級担任や部活動の顧問を任されるなど、正規の教員にひけをとらないほど忙しく、採用試験の勉強時間がほとんどとれないことに不満や不安を感じている。たとえば、教員としてのキャリアが十分ではなく、授業の準備などに多くの労力を費やしてしまうことが影響していると前置きしながらも、それでも働きながら試験勉強することがいかに難しいかを説明する語りは少なくない。また、採用試験に合格するためには仕事を辞めて本気で勉強する必要があるという意識も強い。

それにも関わらず、簡単には今の仕事を辞めることができないようだ。なぜなら、第6に、学級担任や部活動など、実際に学校現場で働くなかで教員としてのやりがいを感じており、また、民間企業に比べて給料が高いということにも魅力を感じているからである。正規教員と同額ではないものの、それでも民間企業の平均的な給料に比べたら相当高い。ただし、ここで注意したいのは、はじめから給料に魅力を感じていたわけではないという点である。実際に非正規教員として働き、生活していくなかで、高給の魅力に徐々に気づいていく。こうした側面は、経済状況が逼迫し、労働市場が狭隘かつ不安定な地方において顕著といえるのではないか。

以上、非正規雇用教員という働き方を、職業選択という観点からみてきた。まとめると、教員という職業と地元就職の両方に強く拘り、また、こうした志向性に対して、職業的地位が安定している親は肯定的であり、物心両面で援助する傾向にある。また、沖縄県の

採用試験の競争率は非常に高く、非正規として働く者が周りにたくさんいるため、非正規雇用教員として働くことに後ろめたさを感じなくてもすむような環境にあるといえる。そして、正規教員にひけをとらないほど忙しく、採用試験の勉強をする時間がとれないことに不安や不満を感じ、試験に合格するには仕事を辞めて本気で勉強する必要があると考えているにも関わらず、教員としてのやりがいや給料に対する魅力を感じているがゆえに、そう簡単には今の仕事を辞めることができないといったジレンマを抱えている状況が指摘できる。

3. 若干のまとめ

近年、若者の「学校から職業への移行」(transition) 研究において、「地元志向」という側面から若者を捉えようとする動きがあるが、その多くが、学歴による差異を問わないか、もしくは非大卒層を対象に議論してきたきらいがある。それは、大学進学が地元志向に大きな修正を加え、地元に残るのはもっぱら非大卒層であるといった認識が支配的だからだろう。その意味で、沖縄の非正規雇用教員を事例に、地元就職に拘る大卒層の職業選択に注目した本研究は、これまでの地元志向論に新たな視点を提供する。

(なお、調査概要や分析結果の詳細、参考文献については、当日別紙を用意する)